

## 目の不自由な人が安全に暮らせる親切

東京都 第二砂町中学校 1年 矢澤 帯輝

ぼくは今までに、たくさんまわりの人に親切をしてきました。しかし、できなかった親切の方がたくさんあると思います。

ぼくは、バスや電車で席をゆずる、エレベーターで順番をゆずる、人の落としたものを拾うなどの親切をしてきました。一方、道に迷う人に声をかけられない、ぶつかってしまったても謝れない、などのこともありました。そのできなかった親切をぼくは考えてみました。

ある日、公園から家に帰る途中で信号があり、赤信号だったので止まりました。すると、目の不自由な人が後ろから来ました。このときは妹といっしょでした。その人は、信号の前の点字ブロックのところで止まりました。その人は、つえのようなものを持っていて、地面を探っているときに、ぼくの足にそのつえのようなものが当たりました。その人はなにも言わないまま、信号が青になりました。

ぼくは、足につえのようなものが当たったので、早歩きで信号を渡ってしまいました。その人は青信号に気がついていないようで、うろうろしていました。ぼくは、(なんであの人にひとこと声をかけられなかったんだろう) と思いました。

すると、自転車に乗った人が「信号、青ですよ」と、一声かけていました。そうしたら、目の不自由な人は「どうも」と言って、行ってしまいました。自転車に乗っていた人も行ってしまいました。ぼくは、目の不自由な人を見ただけでしたが、家に帰ってからその人のことを考えてみました。

(もしも自分も目が不自由で、誰も声をかけてくれなかったら、どうなっていたんだろう)。

すると、申し訳ないという気持ちでいっぱいになりました。そして、次はあの自転車の人のように声をかけられたらいいなと思いました。

世の中には、親切がないと生きていくことが難しい人たちも、たくさんいます。もしも自分がそのうちの一人だったとしたら、とても大変だろうと思います。それに、自分のように困っている人を見ているだけの人ばかりだったら、目の不自由な人は信号を安全に渡れないと思います。しかしそれとは逆に、自転車に乗っていた人のように、声をかける人が増えれば、目の不自由な人が安全に信号を渡ることができます。

ぼくはこの経験を生かして、もしも困っている人がいたら積極的に親切をしてあげて、たくさんの方が安全に暮らせるように心がけたいです。